

社会人

第81話

移動図書館車を南アに贈る活動を続ける連沼さん(プレトリア)
＝写真 今井拓也

ブオオと砂じんを巻
き上げる車輪の音が、南
アフリカの黒人の子供ら
に「夢の車」の到着を告
げる。地域を巡り、本を
届ける日本の移動図書館
車が今、南アで第二の人
生を送っている。懸け橋
となったのは連沼忠(は
すぬま・ただし、68)。
「南アフリカ初等教育支
援の会」(サペシ、
http://www.sapesi-ja
pan.org)を立ち上げ4
年。昨秋は12台がはるか
海を渡った。

識字率35%

ある小学校で原因の一
端に触れた。「図書館が
ない」。マンデラ時代、
全国に約2万6000の
学校が整備され、国の礎
となる教育に力が入り始
めた。しかし、
の児童書を積み、年4回
の学期始めに学校を巡
回。本を貸し出して期末
に回収、次の学期にまた
訪れるサイクルだ。

現在、9つある南アの
州のうち4州で稼働する
図書館車は約3000冊し
の児童書を積み、年4回
の学期始めに学校を巡
回。本を貸し出して期末
に回収、次の学期にまた
訪れるサイクルだ。

子供たちに翼を



南アに懸ける知識の虹

経営者として南ア経済
のダイナミックな変化を
感じてきた。主要産業の
必要。字が読めなくて
は、会社人生で築いた哲

学との自問自答の末。ソ
ニ入社以来、イラン、
スペイン、中国と31年間
の会社人生の大半を海外
で過ごした。ソニースペ
イン社長時代はセビリア
万博でお祭り広場をつく
ったり、バルセロナ五輪
に大型スクリーンを提供
したり。「半分は会社の
ため、半分は地元の人々
のため」を心がけた。
模範は創業者の一人、
盛田昭夫。「良き企業市
民であれ」。盛田が赴任
先を訪れるたび、その心
得を伝えられ、経営のよ
りどころにもしてきた。
「国が発展しなくては、
結局は市場も広がらな
い」。遠回りでも国に溶
け込み、貢献する。スベ
インではカラーテレビの
シェアでナンバーワンの
座を奪っ
た。
引退後、
日本で悠々
自適の日々
を送る選択
を。しかし「教
育さえ改善で
きれば」と
気付きながら、「さらば」
と、貧困を遠巻きに眺め
るにはためらいが残っ
た。強盗に襲われるなど
危険な目に遭いながら南
アで生きると決めた。

人脈フル活用

は96ある教育区に行き渡
るよう1000の大会に乗
せるのが目標だ。
海外に精通した連沼だ
からこそ拡大できた事
業。しかし、最近海外
に進出する日本企業に自
己優先的な風潮が広がる
ことに危機感も感じる。
「これからは社会的責任
(CSR)だけでなく、
シチズン(市民)として
の役割が評価の基準。欧
米に比べ日本はまだま
だ足りない」
今後は「良き一市民」
として虹の国の礎づくり
に力を貸すつもりで連
沼。サッカーのワールド
カップに沸く南アも、祭
りの後の行く末は深い霧
の中だ。「まだ、できる
ことはたくさんある」。
今は熱戦に夢中の子供た
ちが担う将来を見据えて
いる。

敬称略
(西堀卓司)

「感想や自らの体験談
を「社会人取材班」まで
ファクス(03・625
6・2771)、手紙、
電子メール(shakai@
okyo.nikkei.co.jp)と
お寄せください」。